

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

〈日本語解説〉 タヒチ（フランス領ポリネシア）に
おける客家の
エスニック境界とアイデンティティの現地化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009536

〈日本語解説〉

「タヒチ（フランス領ポリネシア）における客家のエスニック境界とアイデンティティの現地化」

序論で触れたように、「南側地域」の客家研究においてタヒチ（正式名称：フランス領ポリネシア）は最も研究蓄積の多い調査対象地の一つである。ただし、20世紀の時点では、客家というエスニック集団に焦点を当てた研究は限られてきた。そのなかで、タヒチの客家と非客家のエスニック関係についておそらく最初に正面から議論を展開したのは、本稿の作者である姜貞吟が『全球客家研究』に掲載した2015年の論文であろう。姜貞吟はフランスで博士学位を取得していることもあり、フランス語で執筆された先行研究をふまえながら、タヒチの客家をめぐるエスニシティ問題について議論を展開している。この論文は、タヒチの華人／客家をめぐる先行研究を整理し、「南側地域」における客家のエスニシティについて議論しているという点で、すでに本書の枠組に合致したものとなっている。そこで本書では、この論考を基盤としつつ一部データを修正し、さらに本議題とかかわる多くの未発表データを追加していただいた。それにより、他の「南側地域」との比較・考察を深めるためのデータを、本書で提示することにした。本稿の概要は以下の通りである。

- ・フランス語と英語で執筆された文献を参照して、タヒチの華人の移住について系統的に整理している。これらの文献によると、華人は、1865年にタヒチ島南部のアティマオノで労働者として従事するために移住を開始した。その後、1890年から1904年に数百名の華人がタヒチに降り立ち、続いて1904年から1914年、1918年から1928年の間に数千という華人がタヒチへ移住した。ただし、これらのデータは華人についてのものであって、客家のものではない。
- ・タヒチの華人は、大きく2つに分けられる。1つは、恵陽、東莞、深圳から移住した客家（現地ではHakkaと呼ばれる）であり、七邑（南海、中山、花県、増城、鶴山、四邑、番禺）から移住した広府人（現地ではPuntiと呼ばれる）である。先行研究のデータによると、客家と広府人の割合は9対1とも、99対1ともいわれる。だが、著者が2013年から2014年にかけて実施したフィールドワークによると、客家と広府人の間には言語、文化のうえで明確な区別をなすことができない。例えば、ある華人は流暢な客家語を話すが、両親とも南海出身の広府人であるという。彼はもともと自身が客家なのか広府人なのか言語からは明確に判断できなかったが、墓碑の出身地を見て祖先が南海の出身であることを確認し、広府人としてのアイデンティティを抱くようになった。広府人は目に見えにくいだけで、実際には相当数いる可能性がある。
- ・さらに、タヒチでは現地化、クレオール化が進んでいる。通婚も進んでおり、客家の男女ばかりが結婚するわけではもはやない。タヒチの華人は、フランス語を使い、フ

ランスの姓を名乗っている。したがって、タヒチで華人がどれだけいるか、エスニック別の統計がなくなったこともあり、正確な数値を知ることはできない。5%とみなされることもあるし、華人の血統を引くポリネシア人を含めれば14%いると見積もられることもある。

- 故郷である中国広東省へ「帰郷」しても言葉が通じず、親戚を訪れても実感が湧かないという現象が顕著になっている。したがって、故郷とつながることによって、ますます故郷との距離が開き、ポリネシアに住む華人であるとする意識が強まっている。タヒチの客家は、客家でもあり、ポリネシア人でもあり、フランス人でもあるという、少なくとも3つのアイデンティティをもちあわせるようになっているのである。台湾の客家運動が海外へ進出するにつれ、タヒチでも客家とは何かについての刺激を受けることはあるが、日常生活のうえで自身の客家としてのアイデンティティを十分に認識しておらず、客家文化が失われる危機に瀕している。

補足をすると、タヒチの客家は確かに自身が客家であるというアイデンティティをもっているが、他方で広府人との言語・文化上の差異が現在あまりみられない。フランス人やポリネシア系のマオヒ（原住民）とも同じ学校に進み、同じ居住地で生活を営み、しばしば通婚するため、非華人系の人々との言語的・文化上の差異も時として顕著ではない。本稿は、こうした客家-非客家の境界の曖昧性、ハイブリッド性を指摘したものである。他方で、本稿ではあまり述べられていないが、1970年代にマオヒがポリネシアン・アイデンティティを強めるにつれて、華人も「ポリネシアの／タヒチの中国人」としての意識を強め、中国の文字（漢字）、文化（獅子舞など）を強調しはじめている。この側面については、童元昭が1990年代の英語論文で系統的に述べている。次の童論文は、特に言語に焦点を当てて、この問題に言及している。

（河合洋尚）